



こんにちは！堤 慎司です。
 鍼師、灸師、柔道整復師
 S61.5.16
 A型、日本酒大好き
 最近は釣りにハマってます

僕の小学校は三年生から少年団に入団できたのですが、兄が野球少年団に入っていたので僕も三年生になり迷わず「僕も野球やりたい！」と父ちゃんに伝えると「よし、じゃあキャッチボールしてみるか！」父ちゃんノリノリです^^いざ、キャッチボールをすると恐怖のあまり顔の前にグローブを構えてしまいました…「あれ？まだげるとアゴにボール直撃！」「なんだ、この危ないスポーツは！」「こんな小さいボール取れるか！」たった一球で野球を諦めミニバス少年団に入りました。ボールも大きいし 笑

～怪我をきっかけに治療家に～

大きなボールで安全なはずのバスケットでしたが、やはり怪我はします。中学生で膝を傷め接骨院に通院していました。そして満足に練習も出来ず通院するのめんどくさくなっていた頃、母の言葉に耳を疑いました…「先生、倒れたらしい」ショックと不安がありました。「これからどうしよう…まだ膝痛いのに…」先生から教えて貰ったストレッチは全くやっていませんでしたが、当時は「痛みが取れないのは先生が居なくて治療出来ないから」と先生のせいにしていた事を今になって思います。膝の痛みも増すばかりで、ついに練習に参加出来ず体育館の隅でただただ見学しているだけになりました。三年生が引退しいよいよ自分達が引張っていく立場になり焦りは増します。もう痛いなど言ってもらえません。がむしゃらに練習に参加していました。「先生が復活した」母の言葉に浮かれていました。「また先生に治してもらって部活が出来る！」期待を胸に接骨院に行き、以前より一回り小さくなった先生を見て僕はまたショックを受けました。今度は自分自身に。



罪悪感だったのかもしれませんが、先生のせいにして自分が嫌になると同時に、絶対にチームに欠かせない選手になってやる！という思いが込み上げて来ました。そして「大きくなったら、自分のように怪我で悩んでいる子の手助けをしたい」という気持ちも芽生えました。これが治療家の道を選んだ理由です。

～祖母の認知症が悪化～

祖父が亡くなったのを切っ掛けに、祖母の認知症が日に日に悪くなっている事には家族一同気付いていました。当時は病院のリハビリテーション科に勤務しており、認知症の患者さんのリハビリも数多く担当していた事もあって、あまり深くは考えていませんでした。むしろリハビリに関しては自信すらありました。しかし祖母と話をしていると「ここは何処ですか？」「ご飯たべてない」など秒刻みの質問責め。夜な夜な起きてきて流しの生ゴミをあさっている姿も何度も見ました。イライラしました。何度も気持ちを押し殺しました。正直、感情的になってしまい怒鳴ってしまった事もあります。家族皆がストレスからのうつ症状の一手前でした。そして、たまたま僕が家に居たある日「お客さんこちらに座って下さい」と言う祖母の言葉を聞いた時は何ともいえない感情が込み上げて来ましたが、その場は必死で涙をこらえました。実の母から言われた父は僕より動揺していると思ったからです。僕はお風呂場で泣きました。誰にも悟られないようにひっそりと…



～僕にしか出来ない事を～

若い時は調子に乗りすぎていた時もありましたが(笑)→身内に関する悩みは非常に深く重たいのは僕が身をもって体験しました。医学的な知識、経験とは別次元の世界です。全く役にたちません。もし悩み・苛立ちがありましたら、僕が聞きます。話すだけで楽になります。ストレスなどの心的疲労による身体症状を楽にするために 笑いも治療もお任せ下さい！→



【第9回ほりお接骨院座談会】は「キャンプ」